

ジャズの巨人たち② マイルス・デイヴィス『死刑台のエレベーター』

映画音楽史に残る名作は 天才ミュージシャンの即興演奏

モダン・ジャズを音楽に用いた映画の傑作といえば、何といても《死刑台のエレベーター》が忘れられない。このフランス映画が日本で公開されたのは1958年秋だった。

58年といえばわが国にモダンジャズ・ブームが起こりつつあったところで、史上最強と謳われたクインテットを率いていたマイルス・デイヴィスは、アート・ブレイキーのジャズ・メッセンジャーズらとともにブームの立役者の一人だった。我らのヒーローであるマイルスがこの映画にどんなアイデアを持ちこみ、どんな演奏をしているのかと、興味津々で見に行ったことを思い出す。そして、いとも鮮やかにノック・アウトされたあの夜、静かな興奮に包まれながら、映像を絶えず呼び覚ますマイルスの音楽の得体の知れない魔力に酔って、まんじりともしなかったことも。

*

《死刑台のエレベーター》は名匠ルイ・マル監督初の劇映画、すなわちデビュー作に当たる。不倫関係にある男女が完全犯罪を目論んで計画を実行する全プロセスを通して、両者の異常な心理を追ったこのサスペンス・ドラマは、モーリス・ロネとジャンヌ・モロウの男女、とりわけ夫の殺害の果てに若い恋人との不倫の成就を画策する熟年女性の妖艶と醜

悪を見事に表現したジャンヌ・モロウの演技と相まって内外で大きな評判を呼び、ルイ・マルを一躍フランスの代表的監督の座に押し上げるようになった。何にもまして画期的だったのが、音楽にマイルス・デイヴィスを起用したことだ。マルにとっても処女作なら、マイルスにとっても彼の手掛けた初の映画音楽だった（因みに、マイルスが演奏家ないし作曲家として生涯に携わった劇場映画は、《ジャック・ジョンソン》、《シエスタ》、《ディンゴ〜砂漠の犬》と合わせて計4本である）。

当時としては例外的なこうした機会がマイルスに訪れた背景には、ヨーロッパでもマイルス・ミュージック、分けてもその独創的な表現とサウンドの賛美者や理解者が急速に増えつつあったことが挙げられる。それまでは聴衆を半ば無視したコンサートでの彼の態度や不遜な言動が、特にフランスの批評家たちの不興を買っていた。だが、詩人のボリス・ヴィアンなど批評家以外の人々の間で、マイルスを評価する声が高まりつつあった。自伝の中で彼はこう書いている。「私の音楽を理解したのは批評家ではただ1人、アンドレ・オデルだけだった。彼は私が会った最良の音楽批評家の1人だ」。オデルはマイルスが歴史的九重奏団で『ラウンド・ミッドナイト』（56

悠 雅彦（音楽評論家）

《死刑台のエレベーター》サウンドトラック盤



年)を吹き込んでまもなく、早くも「パーカーとガレスピー以降の唯一の美学的成功」と、彼を称えた人である。マイルス理解のこの出発点から多くの人たちが彼の音楽を賛美するようになったと言ってもよいが、その輪の中にルイ・マルもいたということだろう。

マイルスによれば、彼にマルを引き合わせたのはジュリエット・グレコだ。彼女は当時マイルスと恋仲だった。57年に歴史的クインテットを解散し、欧州ツアーに出かけた11月半ばのパリでマルと会ったマイルスは、特別に用意された試写会で完成した映画のラッシュ・プリントを見てすっかり気に入った。マルの依頼を快諾したマイルスはツアー中、滞在先のホテルにピアノを運び込ませ、作曲したりアイデアを練ったりして準備を整えたい。

こうして、いよいよ12月初め、ツアーを終えたマイルスとメンバーはスタジオに入った。メンバーは故ヴァルネ・ウィラン (ts)、ルネ・ユルトルジュ (p)、ピエール・ミシュロ (b)らフランス人と、パリに移住していた故ケニー・クラーク (ds)の5人。彼らは、マルが音楽の必要な場面だけをエンドレスにつないだフィルムを見ながら、マイルスが用意した素材を彼の指示に従って演奏した。素材といっても幾つかのメロディックなアイ

ディアがあるだけで、すべてはその場のマイルスの指示で即興的に演奏されていたというのが、この映画音楽の最大の特徴であり、画期的な出来事だと言ってよい。ミシュロのちに言った。「はっきりした主題がどこにもなかった。当時のジャズでは稀な手法で、まして映画の音楽としては画期的だった」と。演奏と作曲のどちらが好きかを聞かれて、「演奏することはどのみち作曲するようものだ」と答えたマイルスの音楽観をまさに地でいった演奏が、この『死刑台のエレベーター』にはかならない。追い詰められた2人の男女の心理的緊張、悲劇を暗示する暗いかげりのあるニュアンスなどなど、ラッシュを見ながらの即興演奏で完璧と言ってよい表現を見事に達成したマイルス、ならびにミュージシャンたちには脱帽せざるをえない。何度聴いても驚くばかりだ。

この映画の成功が機縁となって、ジャズ・メッセンジャーズを起用した《危険な関係》や《殺られる》など、フランスを中心にジャズを用いた映画がたくさん作られたが、これを超えたものはない。実際、マイルスがここで演奏した音楽は今なお新鮮さを失っていない。絶望感を浮かび上がらせる冒頭のブルーギーなトランペットを聴いただけで戦慄が新鮮に甦ってくる。